

大阪 底値探りの動きも不透明感拭えず

(大阪) 大阪地区の鉄スクラップ市況は弱含み様子見気配。一部で品種によって安値修正へ転じており、輸出契約も一定の価格帯での成約がすすんでいることで、市中でも底入れムードが広がりつつも、週明けからは岸和田製鋼が定期炉休を予定し、さらには東京製鉄西日本の価格レベルが輸出商談をリードしているため、先々への不透明感には払拭できにくいようだ。同地区電炉のH2実勢値は3万1000~3万2000円、新断バラ同3万7000~3万7500円(一部上値3万8500円)、鋼ダライ粉バラ同2万8500~3万円見当で推移している。

16日の値下げ以降、東京製鉄に目立った値動きがないなか、地区内では同社岡山工場にはほぼ足並みを揃えてきたところが品種によって安値修正を行い、入荷促進を図る動きも見られる。来12月は一部炉休や年末からの操業休止に伴って、今月を下回る公算が高まりつつも、それでも越年在庫の確保によって需要は上向く気配にありそうだ。また、アジア向け新規輸出高談も

韓国、ベトナムともにH2FOB3万2500円前後での契約がすすんでいることで、「当初の予想を超える下げ幅だったが、輸出も一定量の契約がすすみ、中国鋼材の値下げも落ち着いてきただけに、下げ余地は限定的もしくはここが底値圏にあるのでは」(ヤード業者筋)との見方が広がっている。

一方、週明けの26日からは岸和田製鋼が12月6日まで定期炉休を予定しており、この間の需要減退は避けにくいほか、複数電炉筋は連休前から好調な入荷を保ちつつづけており、「連休後の在庫にも支障はない」(電炉購買担当者)と口にする。輸出商談も契約がすすんだ後は需給双方で再び綱引き状態が向かうことも考えられるほか、東京製鉄岡山、九州工場ともに輸出FOBに比べて価格優位性を保っているため、「一旦、落ち着いているが、方向性がまだ掴みにくく、地区内でも高値修正含めた可能性が消えたわけではない」(商社)との声も聞かれる。

近畿工業(兵庫県)、三木工場の事務所棟をリニューアル

デモ機見学の急増に合わせ応接室を増設

(兵庫) 破碎機・選別機メーカーの近畿工業(本社=兵庫県神戸市中央区栄町4丁目2番18号、和田直哉社長)は6月末から着手してきた三木工場(兵庫県三木市)の事務所リニューアル工事が終了し、11月12日より業務を開始している。

三木工場は同社の機械製造拠点として、全国で納入トップシェアを誇る二軸剪断式破碎機に加え、金属リサイクル業界から評価の高い「スーパーシュレッダー」、「V-BUSTER」などをここで生産している。2万7000㎡の広大な敷地には用途に応じた複数の工場棟や事務所棟のほか、リサイクル技術の開発をすすめる「近畿メカノケミカル研究所」などが存在する。三木工場は他にもデモ機を展示したテスト棟もあり、産業廃棄物処理企業含め、金属リサイクル業界が全国から見学に訪れているが、最近ではサンプルを持参してのテストが急増していることや取引先による多数での見学にも配慮して、事務所内の応接室を従来よりも1室多

い計6室とし、うち1室は最大35名まで収容可能な応接室兼会議室を新たに設けている。

同社は工業系雑品処理に特化した「スーパーシュレッダー」、自動車電装用モーター(ワイ
リニューアルされた事務所棟
パーモーターやパワーウィンドウモーターなど)、小型工業用雑品、小型家電、家電4品目、不燃粗大ゴミなど幅広い品目を処理対象物とした「V-BUSTER」を発売し、来年からの中国による雑品輸入禁止を受け、大きな注目を集めている。このほかにも、将来的な大量廃棄が見込まれる太陽光パネルのリサイクル処理設備「ReSola(リソラ)」を今年から販売するなど、時代の進化とともに多様化するニーズに応えながら、顧客視点での新商品の開発をすすめている。



日々のつぶやき Vol.31 2018.11.26

■ガバンスよりも無駄なしがらみを取り除くべき

▶権限がない人もリーダーシップを発揮した方が組織全体の成果が上がるという考えが広がっており、「目標共有・率先垂範・同僚支援」が常に必要となる。役職・権限・部門という悪しき慣習を捨て去る必要がある(10月18~26日付日経「変わるリーダーシップ①~⑦」より一部要約)
▶しがらみ・慣習は成長を阻害し、社内風土と管理職による下部束縛(責任追及を恐れた自己保身)が停滞を生みます。上司が部下の成長を促進せずに、嫉妬や自己保身のために抑制し、成果を自身の手柄と誇張する。悪質な例ですが、不平等さと組織の壁への無力感が、惰性による作業員化を生み出す原因です。自社を見つめ直すのも必要でしょう。



0120-728-243
(ナニワの富士山)